

沖縄本島及び周辺離島産ハブ毒の比較

富原靖博、野崎真敏、山川雅延、香村昂男（ハブ支所）. p.2-18.

沖縄本島及び周辺離島（伊江島、渡名喜、渡嘉敷、伊平屋、久米島）産ハブ毒の違いを毒作用ならびに免疫学的特異性により比較した。

致死活性、出血活性、腫脹活性などの毒作用による比較では、粗毒、精製毒のいずれにおいても6島産のハブ毒の間には有意の差は認められなかった。また、抗毒素による中和、寒天内沈降反応、免疫電気泳動などの免疫学的特異性による比較でも差は認められなかった。

沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書（VI） p.1-83.

水納島ハブ駆除実験

勝連盛輝、吉田朝啓. p.1-4.

水納島におけるハブ駆除実験は、昭和52年に開始され今年度で6年目を終えた。完全駆除までの期間が、当初目標の5年を越えたことは、経済効率上残念なことではある。水納島における実験は、生態学的な情報を得ることを目的としており、除去による環境への影響を最小限に留めることに留意したため、天敵の導入や殺蛇剤の散布など、他の駆除手段の併用は行なわなかった。しかし、トラップのみでも駆除の効果は徐々に認められてきており、遠からず水納島のハブが駆除されるのはほぼ確実である。

昭和57年は5月1日より11月30日まで、のべ罠数32956日・台で調査を行い、20個体のハブを捕獲した。1日1罠当たりの捕獲数は 0.61×10^{-3} で、初年度の 2.04×10^{-3} の約 $\frac{1}{3}$ である。

4村で収集されたハブ等の計測結果

新城安哲、西村昌彦、城間侂、勝連盛輝. p.5-6.

蛇類の生態学的知見を得るため、1982年5月より4村においてハブ等の収集を行なった。40匹のハブと4匹のアカマタが収集され、それぞれの部外形態——頭胴長・尾長・頭長・鼻眼長・体重等を計測し、胃内容物の有無や脂肪体重量についても記録した。生殖腺と椎骨は、生殖と令構成を調べるために保存した。

サキシマハブ採集調査

城間侂、西村昌彦、新城安哲. p.7-14.

1982年10月と1983年1月に、石垣島の於茂登岳周辺の5河川において、サキシマハブの採集調査を行った。調査は主に夜間に行い、発見時の蛇の状態を記載すると同時に、捕獲地点の底質、水流からの距離、水温、気温、樹冠の状態、カエルの数等の環境を調べた。捕獲したサキシマハブは、数時間後にエチルエーテルで殺し、その日のうちに体重を測定した後開腹し、10%ホルマリン液で固定し、ハブ支所へ持ち帰った。10月に22個体、1月に1個体のサキシマハブが捕獲された。これら全標本について、頭胴長、尾長、頭長、眼と鼻の間の距離、胴中央部の体鱗3枚の長さ、腹板数、体鱗列数、体重などの外部計測を行った。また、脂肪量も測定し、消化管内の食物や寄生虫も調べた。頭部と胴中央部の骨の一部は、令査定用に保存した。

本報告では、10月と1月の調査結果を示してある。

ハブ捕獲器の誘引餌としてリュウキュウジャコウネズミを用いる試み

三井興治. p.15-18.

強い体臭を持つリュウキュウジャコウネズミ（以下ジャコウネズミ）は、容易に捕獲でき（0.7/トラップ・夜）、キャットフードで飼育可能である。1982年10・11月にハブ捕獲器6台をハブ支所近辺の林内に4日間、また同4台をハブ支所放飼場内に18日間、いずれも半数にはジャコウネズミを、残りにはマウスを入れて、設置した。林内に設置した

マウス入りの捕獲器は、マンガースに攻撃されたが、ジャコウネズミ入りのものは無事であった。放飼場内でそれぞれの餌のトラップに、ハブが1個体ずつ捕獲された。

脱皮殻からハブの大きさを推定する方法

西村昌彦、香村昂男、p.19-23.

ハブと脱皮殻の胴体前中後部の体鱗3枚の長径を測定した。3枚の平均値は胴中央部で大きく、また脱皮後のハブのものの方が脱皮殻が大きかった。ハブの頭胴長は、脱皮殻の鱗の長径(胴中央部のもの) $\times 285$ 、または同(部位不明の鱗の長径) $\times 297$ で推定可能である。

脱皮殻からのハブの密度推定の試み

三井興治、西村昌彦、p.25-29.

17枚の脱皮殻を種々の環境に放置した結果、その寿命は30~70日以上と推定された。

1982年のハブの秋の脱皮期のあとに、沖縄島内の林や部落等の環境内を、2人で約1時間、のべ9回にわたり、脱皮殻を捜したが、発見数は1のみで、脱皮殻をハブの密度推定に用いることは困難である。

ライセンスと捕獲器によるハブの相対密度の推定 I

西村昌彦、p.31-43.

1982年に行なった沖縄島北部におけるライセンスと捕獲器を用いたハブの密度調査の結果、ハブの捕獲数は、2個体/47.4時間の川ぞいの歩行、1個体/20回(7.3時間)の林道の自動車走行、2個体(うち1は死体)/323km(8.1時間)の舗装道路の自動車走行、14個体/1674捕獲器 \times 日(川ぞい)、であった。いずれも個体数が少ないため、相対密度として比較に用いることはできないが、ハブ捕獲のためには、捕獲器を用いるのがもっとも効率が良い。

ハブの追跡装置—糸まきのまき方と発光装置の寿命—

西村昌彦、p.45-49.

絹糸を材料に手製の糸まき装置を用い、安価で軽い(例、3g/500m)糸まきの作製法を完成させ

た。発光装置(約5g)は、1ヶ月以上の間発光を継続した。

糸まき法によるハブの追跡 I

西村昌彦、p.51-65.

1982年7月、沖縄島北部の山中において、5個体のハブに糸まきをつけ追跡した。最長の追跡期間は2週間であり、ハブは次々と隠れ場所を換えた。最長の一夜の歩行距離は約150mであった。

雌ハブによる雄ハブの誘引実験—予備実験—

西村昌彦、p.67-70.

1982年3・4月に浦添市の林内において、ハブの雌を入れた3台のハブ捕獲器を設置したが、49捕獲器 \times 日の間、ハブの捕獲はなかった。

防蛇壁の開発—網の壁が要する高さ—

西村昌彦、p.71-83.

1982年秋にハブ支所放飼場内において、種々の高さ・構造のナイロン製防蛇壁の実験を行なった。大きいハブ(頭胴長約155cm)は、前身を60~70cm立てることができるが、70cm(または60cm)のななめ壁・かえし付壁を越すことができなかった。ハブは網ぞいに置いた餌なしの捕獲器によく入った。

安価な防蛇網は、ナイロン網(6mm目)と亜鉛支柱を用い、170円/mで作製可能である。